はじめに

「この石垣はいつの時代でしょうか」。現場で石垣を見ていると、こんな質問をよく受ける。「近世ですわ」と答えると、ちょっとがっかりした表情になるのは、きっと「戦国」の言葉を期待していたからだろう。戦国には戦国なりの石の積み方、石材の採り方があるため、石垣を見れば戦国ではないと判断できるのである。

かといって、城や石垣にかかわる職場や研究にたずさわっていなければ、そうそう多くの石垣を見くらべることなどできない。だとするなら、誰でもが「戦国の石垣とは、こんなもんだ」とおおざっぱにわかる石垣の見方を、ひとつまとめてみよう、というのが本書のねらいである。

城と石垣の歴史は、古代山城（さんじょう）を考えれば、七世紀にまでさかのぼるのだが、本書でターゲットを戦国時代にしぼったのは、最近、日本全国各地の城跡で戦国期の石垣が多く確認されているからである。数が増えれば増えるほど、共通項や相違点も次第にわかってきて、時代の個性や地域の特性などが、ようやくぼんやりとだが、見え始めてきたのである。

本書は、その最前線の成果の一部を一般の方にもわかりやすく、多くの写真を載せながら解説していきたい。もちろん、まだ確定していない事柄もあるため、推測をまじえることになる。現時点での私自身の見解として受け取ってもらいたい。

さて、戦国の城郭石垣は、大きくわけて二つのタイプに分かれると考えている。一つは石を壁面にはりつけるだ

けのタイプで、もう一つは石材と地山のあいだに栗石（裏込石とも）を詰め込むタイプである。私は前者を〝石積み〟、後者を〝石垣〟と分けるべきだと考えている。技術がまったく違うからだ。

石積みは、城を築く場所で採集できる自然石や、ざっくりと割りとった粗割石を使うことがほとんどである。高さも4メートルは越えず、数段ほど積み上げる。ほぼ垂直に積むのも特徴である。日本列島の各地では、十五世紀後半以降、こうした石積みが多く築かれ始める。最近明らかになった重要な歴史的事実である。

Ⅰ章では石積み・石垣の分布と構造、技術の概略などを紹介し、Ⅱ章では安土築城以前の用例を中心に紹介したい。Ⅳ・Ⅴ章では、信濃と播磨・備前の事例をもって戦国の石積み・石垣を具体的にとりあげる。各章を通観すればわかるように、もはや戦国時代の城においては、石積みはそう珍しい施設ではなく、曲輪や切岸、堀切や土塁と同等の城郭施設であったようだ。

石積みではなく、石垣が城に採用され始めるのは、戦国時代の後半、十六世紀代も半ば過ぎになる。かつては、戦国時代にはほとんど石垣は用いられず、本格的に石垣を城に導入したのは織田信長だと考えられていた。ところが、最近では、この評価には修正が必要になってきた。天正四年（一五七六）の安土築城をさかのぼること二十年前、弘治二年（一五五六）の段階で、近江守護六角氏が居城の観音寺城に石垣を築くのである。巨大な石材を用いた石垣であり、高さ10メートルに及ぶ箇所もある。加えて栗石も充填しており、矢穴技法による採石痕も確認されている。かなり高度な技術によって築かれた石垣なのである。

さらに三好長慶が天文二十二年（一五五三）に入城した芥川城と、永禄三年（一五六〇）の飯盛城でも、石垣が多用されていることが明らかになった。飯盛城では城域の大部分に石垣が築かれていることを分布調査によって確認している。いずれも巨石を用い、背面には栗石が充填されている。この巨石の採用は重要なポイントで、のちの織田信

長の築城にも通じるし、近世城郭の石垣にも連綿と受け継がれてゆくのである。

こうした観音寺城や芥川城、飯盛城の石垣は、安土築城以前の石垣としてたいへん貴重な資料である。Ⅱ章でくわしくとりあげるように、六角氏や三好氏のほか、越前の朝倉氏も一乗谷の館に石垣を採用している（山城には使わない）。さらに信長も安土城以前に拠点としていた小牧山城・岐阜城で石垣を築いている。いずれも畿内近国の事例だが、彼ら戦国武将はどこから石垣の技術（石積みではない）を取り入れたのだろうか。

私の想定では、石材の採石・加工には専門の職人が欠かせず、彼らを雇用するのだと考えている。築城主体である六角氏・三好氏・朝倉氏・織田氏等の武家領主は、職人を丸抱えはせず、必要なときに必要な人材と資材を確保したのではないだろうか。その職人たちは、ふだんは寺社勢力のもとで働いていたのだと考えている。Ⅲ章では、この採石技術の一つである矢穴技法にスポットを当て、穴太積みといわれている石工職人の実態にも迫りたい。

最後のⅥ章では戦国の石積み・石垣の特徴がよりよく理解できるよう、織田・豊臣期の石垣をいくつかとりあげた。比較することによって時期差はより明瞭になるだろう。

ところでなぜ、戦国武将は城に石積み・石垣が必要だと考えたのだろうか。難しい問題である。壁面の保護といった要因はもちろんあるが、石垣の構築に関しては最近、巨石の利用に象徴されるように、「見せる」石垣、権威の象徴といった捉え方が主流になっている。でもなぜ、武将たちは城を「見せる」必要にかられたのだろうか。城をたんなる防御施設だとする考え方だけでは理解の及ばない、城に対する武将たちの思考が石垣に表現されているのではないか。そうした見通しをもっているが、本書では十分な答えを用意できていない。今後の課題である。

まだまだ、わからないことはたくさんあるけれど、日本の戦国史を読み解く材料として、あるいは城を訪ねるときの楽しみの一つとして、戦国の石積み・石垣の見方が本書を通して少しでも理解してもらえたなら、幸いである。